日本思想史学会2018年度大会　　　　　　　　　　　　　2018年10月14日・於　神戸大学六甲台キャンパス

**徳富蘇峰の身代わりとしての福沢諭吉**

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　静岡県立大学　平山　洋

**①　福沢諭吉（1835～1901）の思想が昭和六年（1931）勃発の満州事変以後の日本の国策に影響を与えたという主張は、安川寿之輔によってはじめて展開された。**→『福沢諭吉のアジア認識』（高文研刊・2000年）

安川の主張は、現行版全集の「時事新報論集」所収の社説と一九三〇年代の時局との類似性に基づいていた。→『福沢諭吉の戦争論と天皇制論』（高文研刊・2006年）

そもそも「時事新報論集」は、そう見えるように石河幹明によって編まれていた（平山の発見）。→『福沢諭吉の真実』（文藝春秋刊・2004年）・『アジア独立論者福沢諭吉』（ミネルヴァ書房刊・2012年）

**②　戦時期の代表的イデオローグは徳富蘇峰（1863～1957）であった。**

『新日本の青年』（1887）で福沢批判者としてデビューした蘇峰は、「大東亜戦争」期においても大日本言論報国会の会長として中心的言論人の地位を占めていた。→今日蘇峰は、日清戦争（1894）までの言論活動によってか、または『近世日本国民史』の作者としてしか記憶されていない。

現実の蘇峰は、日清戦争後は時の政府の活動に棹差す体制派言論人だった。その期間は、三国干渉（1895）から第2次世界大戦終結（1945）までの50年間にも及ぶ。→ここで蘇峰の長い生涯を時期区分する（伊藤弥彦による）。

第1期自己形成時代（1863～1880）、兼坂塾など・熊本洋学校・同志社英学校

第2期社会改良家時代（1881～1894）、大江義塾・『新日本之青年』『将来之日本』『国民の友』『国民新聞』

第3期政権の黒幕時代（1897～1918）、第2次松方内閣・桂内閣・寺内朝鮮総督府顧問・『国民新聞』

第4期立言者ならびに修史家時代（1913～1929）・『国民新聞』『大正の青年と帝国の前途』『近世日本国民史』

第5期大衆伝道家ならびに修史家時代（1930～1945）・毎日新聞社賓・蘇峰会『昭和国民読本』『近世日本…』

第6期蟄居隠居ならびに修史家時代（1945～1957）・『終戦後日記』『近世日本国民史』

大日本言論報国会は第5期の活動。その機関誌『言論報国』のモットーは「指導者の指導誌」というもので、言論人蘇峰による戦争指導が活動の目的だった。

**③　昭和一九年（1944）三月、蘇峰は『言論報国』誌上で福沢を功利主義者・非愛国者として批判した。**

福沢批判部の全文

それでもう一つで終わりたいと思ふが、福沢先生は伊藤とか、西園寺とか、陸奥とかいふ人よりも学者の大いなる看板を掲げ、大先生として三田の一角に拠つて隠然明治政府より一敵国視せられた人である。政党の人も彼を頼りにした人もあり、又怖かつた人もある。然し兎に角福沢先生は当時薩長政府に対して一番大いなる存在であつた。この点は実に先生は偉いと思ふが、然し西洋のことを無茶苦茶に輸入する点に於ては伊藤や陸奥なんかの比ぢやない。より以上のものである。彼は西洋のいいことを輸入するといふよりも、日本のことを悉く壊すといふ方針でやつて来た。福沢先生の破壊した力といふものは非常に大きなものであつた。福沢先生にいはすれば世の中は一切平等である。所謂楠公権助論の如きは余りにも世間に聞へてゐる。先生自身拝金宗でないにしても、拝金熱は先生によりて鼓吹せられた。福沢先生もその点に於ては板垣先生と同様に議論と人間とを比べてみれば、議論より人間は余程高尚な人であつた。又議論よりも人間は余程日本人であり、愛国者であつたと思ふが、議論だけは非常に困つた。福沢先生は功利主義といふものを理論の上でいふたばかりでなく、その実行、実現を皆に示してやつたために天下の人心は悉くそれに靡いた。日本の従来の良風美俗といふものをして全く地を払ふに至らしめた。私共は福沢先生に対して啓蒙運動をされたことについては非常に感謝するけれどもが、日本の従来の良風美俗をして地を払ふに至らしめたことについては福沢先生はまことに重大なる責任を持つて居られることと思ふ。

　私は「新日本の青年」といふつまらない小冊子を書いて居ります。それを出版したのは明治二十年ですけれども、十七年から十八年にかけて書いたものである。その本は私は福沢先生を対象として書いた。実は福沢先生の議論に対する私の抗議を書いたものであります。福沢先生はさうでなかつたらうが、その弟子は所謂人種改良論などといふ本もつくり、拝金宗などといふ本もつくつて公然その方面に活動した。所謂支那人の言葉に「其の父仇を報ずれば其の子は劫を行ふ」といふ言葉がある。父が敵討をしてみせれば息子は斬取強盗をしてみせるといふ諺があるが、弟子の方は先生よりも相当下つたところまで落ちて行つたんぢやないかと思ふ。

　この功利主義といふものが非常に盛んになつた。さうして福沢先生の最後の結着は独立自尊といふことになつてしまつた。独立自尊といふことは要するに個人主義を異つた言葉で説明したものである。それでこの思想といふものは非常に個人主義的である。独立自尊であるために例へば国家の大事でも自分に於ては何等頓着ない。今日の戦さでも誰が戦さをして居るか。まるで外の人が戦さをして居るといふやうなわけであつて、我々は何をして居るかといへばそれをただ眺めて居るといふだけである。皆竹林の七賢人のやうな考へを独立自尊のために持つやうになる危険がある。然し福沢先生は日清戦争のときには先んじて寄付金を出して居るといふやうな人である。自分は愛国心がある。若し先生が今日居られたらば先生は言論報国会の一大指揮者となられたであらう。然しいはれることは独立自尊である。独立自尊でやつて行く以上は愛国といふことなどとは縁が遠くならざるを得ないやうな結果になつて来た。（『言論報国』昭和19年3月号61、62頁）

**④　昭和一九年（1944）五月、慶應義塾長小泉信三は『三田新聞』（同年五月）紙上で蘇峰への反論を公表した。**

蘇峰への反論は石河作の『福沢諭吉伝』（1932）と同編の『続福沢全集』（1933‐1934）に基づいていた。→石河が描く福沢像は、実際のところ蘇峰の立場(『大日本膨張論』1894)と大差がない。また石河が選んだ石河作（？）の社説の論調は、同時期の『国民新聞』と大差がない。石河と蘇峰の考えは似通っていた（ともに民族の生存圏拡大を重視）。福沢と石河＋蘇峰の考えは違っていた（福沢は国力を面ではなく経済力として捉える）。蘇峰はそれを見抜いていて、福沢の言論上の後継者を高橋義雄とみなしていた（石河は完全に無視されていた）。

蘇峰に反論した小泉が福沢と石河の立場の差に気づいていたかは不明。→とにかく石河の弟子富田正文の手を借りて反論を作成し、それは慶應義塾の公的見解として扱われた。

小泉信三による蘇峰への反論

小泉は三月中に四百字詰原稿用紙にして三〇枚ほどもある反論を執筆して『言論報国』編集部に寄稿した。四月下旬に掲載不可の返事があったため、原稿を回収して今度は慶應義塾内の新聞『三田新聞』に載せた。その「徳富蘇峰氏の福沢先生評論について―先生の国権論その他―」（『小泉信三全集』第二一巻、昭和四三年（1968）一二月・文藝春秋刊、所収）は五月一〇日付の同紙五四六号にあって、冒頭に蘇峰のどの発言に反論するのかが示されている。

反論の第一：蘇峰が「彼（福沢）は西洋のいいことを輸入するといふよりも、日本のことを悉く壊すといふ方針でやつて来た」とする点

反論の第二：「福沢先生其人は愛国者であつたが、その（楠公権助論）議論だけは非常に困つた」などとする点

反論の第三：「独立自尊でやつて行く以上は愛国といふことなどとは縁が遠くならざるを得ない」とする点

注：蘇峰は明治の初頭にはすでにあった福沢批判を雑誌『言論報国』で蒸し返しているに過ぎない。それに対する小泉の反論は、福沢の愛国心と大陸積極策を強調している石河幹明の『福沢諭吉伝』と『続福沢全集』に主として依拠している。

小泉による蘇峰への反論のキモ

最後に福沢の教えを受けたものは愛国と縁が遠くなる云々の第三の点についていいます。これは簡単に申します。福沢の教えを受けたものといえば、私共の同窓の者は皆そうです。そうしてその中の幾千百の青壮年は今陸上海上空中において戦っています。そうして彼等は皆福沢先生の名を口にして襟を正すものですが、それ等凡べての者が非愛国者だと徳富氏は言われるのですか、まさかそんな事を言われるとは思いません。しかしこの一段の言葉は不穏当の嫌いがあると思います。取敢えずそれだけをここに申して置きます。（『小泉信三全集』第21巻384、385頁）

注：愛息小泉信吉の戦死から2年後の発言であることに注意。

**⑤ GHQによる戦争協力言論人への追及は弱かった。戦後大日本言論報国会だけは通常の文化統制団体とはみなされず、超国家主義・軍国主義の団体として解散を命じられた。**→市川房江らその理事は公職追放令の対象とされ、蘇峰自身も一時はＡ級戦犯容疑者の通告をされている。

**⑥　 安川が描く「大東亜戦争」のイデオローグとしての福沢というのは、じつは蘇峰の幻影だった。**→石河作『福沢諭吉伝』と同編『続福沢全集』が描き出す福沢像が、実態としては蘇峰の姿だとするならば、安川は知らず識らずのうちに福沢ではなく蘇峰を批判していたことになる。

『大日本膨張論』第十結論より引用

　漫りに卒然として、武をけがすにあらず。強を恃んで弱を凌ぐにあらず。故なくして、清国を侵掠せんとするにあらず。約言すれば征清の一挙は、物質的と共に、精神的の意義を有す。腕力的と共に、道義的の意義を有す。一時的と共に、永久的の意義を有す。部分的と共に、全体的の意義を有す。

　思ふに彼の清国なるもの、頑冥不霊にして、大日本が歴史の順流に乗じ、其の条理に於て、当然占む可き前路を阻遏（ソアツ）し、却て之に臨むに暴慢無道を以つてす。清国今日の非運、今日の屈辱、固より彼自から取るの禍に他ならず。

　吾人は清国なるが故に、之を敵としたるにあらず。苟も吾人の前途に蟠（ワダカ）まり、吾人が国として享く可き権利と利益とを妨害するものあらば、其の何の国たるを問はず、之を敵とするを辞する能はず。而して清国とた戦ふたるは、清国即ち自から好んで吾人が正当なる、国権の保全と、国運の振作と、国民の膨張に敵したれば也。（『明治文学全集』第34巻271頁、筑摩書房刊、1974年）

注：蘇峰の『大日本膨張論』（1894年12月刊）は書き下ろしではなく、主として『国民新聞』（1890年創刊）の社説の再構成版だった。当時国民新聞社は銀座8丁目にあって、同6丁目の時事新報社とはわずか100メートルの互いに見える位置にあった。伊藤欽亮や石河幹明ら時事の幹部たちは日々国民新聞の社説を注視していたので、両紙の論調は共鳴することになったのである。

**⑦ 戦後小泉らが、福沢の真の姿は石河が描いていたのとは異なっていた、と弁明しなかった理由。**→戦時中に石河にしたがって福沢を弁護したため、戦争が終わってからそれは虚偽でした、とは言えなくなった。→この立場は戦後の慶應義塾出身の福沢研究者（私・平山洋を除く）ばかりか丸山眞男門下の東大出身者（松沢弘陽・飯田泰三・平石直昭ら）にも貫かれている。→こうした状況を、安川は丸山眞男の呪縛、と呼ぶ。

徳富蘇峰の長すぎる生涯

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| 元号（西暦） | 年 齢 | 主な事蹟 |
| 文久3年  （1863年） | 1歳 | 1月25日　肥後国上益城郡益城町杉堂の矢島方（母の実家）に生まれる。父の名は一敬（号は淇水。42歳）、母は久子（35歳）、蘇峰は第5子にして、長男であり、通称を猪一郎といった。父は水俣に在り、葦北郡宰附監察を勤めていた。 |
| 明治6年  （1873年） | 11歳 | 熊本洋学校に入学するも、いくばくもなくして年少の故を以て退学せしめらる。 父の一敬、県令の安岡亮良と衝突して退職する。 |
| 明治9年  （1876年） | 14歳 | 1月30日　花岡山頂にて、奉教の盟を成す（熊本バンドの結成）。 8月　熊本を去って上京し、東京英語学校（一高前身）に入学。 秋、官学の臭味意に満たず、独断にて京都の新島襄の同志社英語学校に奔る。 12月3日　新島襄に就いて受洗する。 |
| 明治10年  （1877年） | 15歳 | 新聞記者たらんとの志を抱き、諸新聞を筆写する。特に福地桜痴の論説を喜ぶ。 |
| 明治15年  （1882年） | 20歳 | 3月　大江義塾を開き、校長となって講学に従う。 夏、東京へ上り、板垣退助（自由党総理）に面会する。また、塾生を率いて、土佐、大阪などに出遊する。 |
| 明治17年  （1884年） | 22歳 | 1月　『明治二十三年後の政治家の資格を論ず』を著述。 秋、夫人・静子（倉園氏、18歳）を迎える。12月、『自由・道徳及儒教主義』を印刷し、同志に頒つ。 |
| 明治18年  （1885年） | 23歳 | 6月　『第十九世紀日本之青年及其教育』を印刷し、同志に頒つ。『東京経済雑誌』に掲載。 9月　新体詩「愛国の歌」を作り、塾生と唱和する。 |
| 明治19年  （1886年） | 24歳 | 5月　『将来之日本』を著述し、7月、原稿を携えて土佐に板垣退助を訪ね、8月、更に東京に田口鼎軒を訪うて、12月、経済雑誌社より自費出版する。俄然、文名天下を風動する。 |
| 明治20年 | 25歳 | 2月　民友社を創立し、雑誌『国民之友』を発刊する。 天下の識者、挙げて歓迎する。 3月　『新日本之青年』（「第十九世紀日本之青年及其教育」改題）を出版する。 |
| 明治21年  （1888年） | 26歳 | 新島襄を翼けて、同志社大学の創立に努め、募金のため奔走する。 |
| 明治22年  （1889年） | 27歳 | 正月　『日本国防論』を民友社より出版する。 10月　横井時雄と謀って、『小楠遺稿』を編集刊行する。 |
| 明治23年  （1890年） | 28歳 | 2月1日　『国民新聞』を発刊する。その社長、主筆として、昭和4年正月まで健筆を揮う。 |
| 明治24年  （1891年） | 29歳 | 4月　福地桜痴に「幕府衰亡論」を執筆させ、翌年正月まで『国民之友』に連載する。 6月　国民叢書第一冊『進歩乎退歩乎』を出版する。 |
| 明治25年  （1892年） | 30歳 | 正月　総選挙を前に、山田武甫と熊本県下を遊説する。 9月　『家庭雑誌』を創刊する。 |
| 明治26年  （1893年） | 31歳 | 5月　国民叢書第四冊『静思余録』を出版する。 12月　『吉田松陰』（前刊本）を出版する。 |
| 明治27年  （1894年） | 32歳 | 9月　天皇の行幸に陪して、広島大本営に赴き、自ら特派員を指揮する。その論説と報道とは、朝野の間に重きをなす。 12月　『大日本膨脹論』を出版する。 |
| 明治28年  （1895年） | 33歳 | 2月　雑誌『英文極東』を創刊する。 4月　大総督府に随行して旅順に渡る。遼東還付の報に悲憤. |
| 明治29年  （1896年） | 34歳 | 3月　両親奉養のため、逗子桜山に「老竜庵」を新築する。 5月　欧米視察の途に上り、英京より、ドイツ、ポーランド、ロシア、ルーマニア等を経て、パリで越年する。 |
| 明治30年  （1897年） | 35歳 | 2月　英京にて篤疾に罹るも、5月、米国を経て、6月、帰朝。 7月　内務省参事官（高等官二等、正五位）に任ぜられる。 |
| 明治31年  （1898年） | 36歳 | 正月　内閣総辞職し、野に下る。 9月　『国民之友』『家庭雑誌』『英文極東』の三誌を、『国民新聞』に合併の名目で廃刊する。 |
| 明治32年  （1899年） | 37歳 | 5月　『勝海舟』（民友社友共著）を出版する。 同月　自宅を赤坂氷川町より青山南町（青山草堂）へ移す。 11月　『社会と人物』を出版する。 |
| 明治33年  （1900年） | 38歳 | 正月　『国民新聞』3,000号に達する。 7日　伊藤公、井上侯の九州下りにつき、接待のため帰郷する。 |
| 明治34年  （1901年） | 39歳 | 4月　国民叢書第十九冊『処世小訓』を出版する。 8月　北海道を漫遊し、9月、帰京する。 |
| 明治35年  （1902年） | 40歳 | 2月　国民叢書第廿一冊『教育小言』を出版する。 4月　伊勢大廟を拝し、松阪を経て、吉野にて観桜する。 |
| 明治36年  （1903年） | 41歳 | 4月　『国民新聞』の4,000号を記念し、明治天皇御製、昭憲皇太后御歌集を、『千代の光』と題して刊行し、読者に頒つ。 5月　『吉田松陰』を漢訳し、上海の通雅書局、南京の明道書荘より出版する。 |
| 明治37年  （1904年） | 42歳 | 2月　日露開戦につき、桂首相より情報関係、言論方面の指導を托せられ、政治の枢機に参画する。 5月　国民叢書第二十五冊『第四日曜講壇』を出版する。 |
| 明治38年  （1905年） | 43歳 | 9月5日　日露講和条約（ポーツマス条約）に不満を抱ける暴徒は、日比谷公園に参集し、大挙して国民新聞社を襲撃する。暴徒は6日も襲来したが、新聞は休刊せず。 |
| 明治43年  （1910年） | 48歳 | 正月　『元田先生進講録』を出版する。9月、朝鮮における新聞政策を建言し、『京城日報』を監督する。大正7年7月まで監督の任にあり、毎年京城に赴く。 |
| 明治44年  （1911年） | 49歳 | 8月　貴族院議員に勅選される。 1月、5月、9月と、三度び京城へ赴く。 |
| 明治45年  大正元年  （1912年） | 50歳 | 8月15日　『先帝御聖徳一班』を刊行し、全国の小学校に頒布する。 10月16日　『明治天皇仰景画録』を出版する。 |
| 大正2年 （1913年） | 51歳 | 2月10日　国民新聞社、暴徒に襲撃さる。当時、桂首相に新党樹立の志あり、その懐刀として画策最も努める。 7月　平福百穂を伴ない、瀬戸内、耶馬渓などに遊ぶ。この間の紀行文『山水随縁記』は、翌年正月出版する。 11月　『政治家としての桂公』を出版する。 12月　『時務一家言』を出版する。 |
| 大正3年  （1914年） | 52歳 | 4月3日　父の一敬に陪して、小金井に桜花を見る。 7月及び10月、朝鮮に赴く。 11月　京城西大門外、「愛吾盧」を引払い、旭町「南山麓舎」に移る。 |
| 大正4年  （1915年） | 53歳 | 3月　『世界の変局』を出版、全国の図書館に寄贈する。 8月　朝鮮に赴き、京城北門外、白雲洞に居を定め、「鵲巣居」と名づける。 11月　大礼に際し、勲三等に叙せられ、瑞宝章を賜わる。 |
| 大正5年  （1916年） | 54歳 | 4月　『大正政局史論』を出版する。 3月と11月　朝鮮に赴く。 11月　『大正の青年と帝国の前途』を出版する。 |
| 大正6年  （1917年） | 55歳 | 2月　『公爵桂太郎伝』を出版する。 6月　『蘇峰詩草』を印刷し諸友に頒つ。 9月　朝鮮・満州・支那に遊び、12月、帰朝する。 12月　『杜甫と弥耳敦ミルトン』を出版する。 |
| 大正7年  （1918年） | 56歳 | 5月　『近世日本国民史』の準備成り、「修史述懐」を発表、次いで『織田氏時代』を起稿。7月1日より、これを『国民新聞』に連載する。 |
| 大正9年  （1920年） | 58歳 | 4月　伊勢大廟、畝傍御陵、桃山御陵、出雲大社に参詣し、厳島を経て帰京する。 9月　『大戦後の世界と日本』を出版する。内一部を英訳して、『日米の関係』と題し、ニューヨークのマクミラン社より出版する。 |
| 大正10年  （1921年） | 59歳 | 4月　朝鮮各地を周遊し、奉天に及ぶ。 12月　青山邸を提供して青山会館を設立する旨を『国民新聞』に発表する。 |
| 大正11年  （1922年） | 60歳 | 4月　郷里熊本に展墓し、九州を漫遊し、5月下旬、帰京する。 8月　北海道を漫遊し、9月中旬に帰京する。 |
| 大正12年  （1923年） | 61歳 | 正月　『中央公論』に、「還暦を迎ふる一新聞記者の回顧」を掲載する。 5日　『近世日本国民史』既刊十冊に対し、帝国学士院より恩賜賞を与えらる。 9月1日　関東大震災のため、国民新聞社も民友社も全焼する。 |
| 大正13年  （1924年） | 62歳 | 2月　『政界の革新』を出版する。 4月　『精神の復興』を出版する。 晩春、大森「山王草堂」落成、一家を挙げて移る。 7月　『大和民族の醒覚』を出版する。 |
| 大正14年  （1925年） | 63歳 | 2月11日　『国民小訓』を出版する。 6月　帝国学士院会員に推薦さる。 11月　『三十七八年役と外交』を出版する。 |
| 大正15年  昭和元年 （1926年） | 64歳 | 正月15日　宮中御進講控として、出仕仰付けらる。 4月　『中央公論』に、「頼山陽」なる長文を掲載し、11月、山陽日譜を付して『頼山陽』として出版する。 11月、『西郷南洲先生』を出版する。 |
| 昭和2年  （1927年） | 65歳 | 2月　『昭和一新論』を出版する。 6月　木崎愛吉、光吉元次郎と共編『頼山陽書翰集』（上下巻）を出版する。 9月18日　弟・健次郎（蘆花）を伊香保に見舞うも、健次郎逝去。享年60。 10月　近畿の史蹟を尋ね、九州に到り各地を遊覧する。 |
| 昭和3年  （1928年） | 66歳 | 4月　主婦の友社より『日本名婦伝』を出版する。 5月　『中庸の道』を出版する。 11月10日　御大礼に参加し、勲二等に叙せられ、瑞宝章を賜わる。 12月　『木戸松菊先生』を出版する。 |
| 昭和4年  （1929年） | 67歳 | 正月5日　国民新聞社を退く。 2月　台湾に遊び、3月中旬に帰京、7月に『台湾遊記』を出版する。 3月　大阪毎日新聞社、東京日日新聞社に社賓として招聘される。 5月　亡父・一敬の記念に、金1万2,000円と蔵書を水俣町に寄贈し、淇水文庫（図書館）を設ける。 |
| 昭和5年  （1930年） | 68歳 | 2月11日　蘇峰会発会式を青山会館で挙げ、「維新史の骨髄」と題し講演する。 3月、6月、10月と、九州各地に遊ぶ。 9月　甲・信・越に講演旅行する。 同月　改造社より『徳富蘇峰集』（「日本文学全集」の内）を出版する。 |
| 昭和7年  （1932年） | 70歳 | 3月13日　古稀記念講演会を帝国ホテルにて催す。会するもの一千余名。与謝野晶子の献歌が吹奏される。 4月　胃潰腸のため、南胃腸病院に入院加療する。 12月　改造社より『勝海舟伝』を出版する。 |
| 昭和8年  （1933年） | 71歳 | 3月　民友社における『近世日本国民史』の版権を、明治書院に移す。 5月　『公爵山縣有朋伝』3巻を出版し、山縣公の命日に霊前に供える。 12月　巧芸社より『詩書百幅帖』を出版する。 |
| 昭和9年  （1934年） | 72歳 | 4月29日　旭日重光賞を賜授される。 9月28日　『近世日本国民史』普及版の既刊五十巻刊行記念として、披露会を帝国ホテルで開催する。 |
| 昭和10年  （1935年） | 73歳 | 4月7日　満州国皇帝の招きで赤坂離宮にて帝王学を講ずる。 7月　『公爵松方正義伝』二巻を出版する。 8月　中央公論社より『蘇峰自伝』を出版する。 |
| 昭和11年  （1936年） | 74歳 | 正月3日　阿部充家の葬儀に参列し、霊前に弔辞を述ぶ。 11月5日　文章報国五十年祝賀会を帝国ホテルにて開催する。 12月　明治書院より『蘇翁言志録』を出版する。 |
| 昭和14年  （1939年） | 77歳 | 2月　東京日日新聞社より『昭和国民読本』を出版する。 5月　50万部突破。12月、100万部突破。 6月　盛岡、仙台、袋田などに講演旅行をする。 |
| 昭和15年  （1940年） | 78歳 | 2月　『満州建国読本』を出版する。 9月　三国同盟締結の建白書を近衛首相に提出する。 10月13日　日比谷公会堂にて「余が見たる新島襄先生」を講演する。 |
| 昭和16年  （1941年） | 79歳 | 正月5日　「紀元二千六百一年の展望」と題して放送講演する。 10月　『皇国日本の大道』を出版する。 12月10日　後楽園球場にて「興亜の暁鐘」と題して講演する。 |
| 昭和17年  （1942年） | 80歳 | 2月23日　首相官邸の政治体制協議会に出席する。 5月27日　「為政格言」を起草し東条首相に贈る。 同月　日本文学報国会が設立され会長に推される。 6月　三叉神経痛に眼病再発。10月、東大附属病院に入院加療する。 |
| 昭和18年  （1943年） | 81歳 | 2月14日　東条首相に意見書を送る。 3月6日　大日本言論報国会が発足、会長に推戴される。 4月29日　文化勲章を拝受する。 5月22日　「山本元帥の戦死を悼み国民各位に愬ふ」と題し、放送講演する。 |
| 昭和19年  （1944年） | 82歳 | 2月11日　『必勝国民読本』を出版する。初版50万部を頒つ。 7月10日　サイパン失陥後の国民の覚悟につき、「重大戦局に立ちて」と題して放送講演する。 10月10日　芝増上寺の頭山満の葬儀に参列する。 11月　『蘇峰感銘録』を出版する。 |
| 昭和20年  （1945年） | 83歳 | 4月10日　「鈴木内閣の発足に望む」と題する論説を『毎日新聞』に掲載、憲法第31条の発動、天皇親政を要望する。 8月15日　山中湖畔「双宜荘」にて終戦の詔勅を聴く。 9月2日　自ら戒名を命名し、百敗院泡沫頑蘇居士とする。 12月3日　Ａ級戦犯容疑人に指名される。 |
| 昭和21年  （1946年） | 84歳 | 1月2日　米進駐軍ＭＰが逮捕のため熱海「晩晴草堂」に来るも、老病のため自宅拘禁となる。 2月15日　家督を嫡孫・敬太郎氏に譲る。同時に貴族院議員、帝国学士院会員、芸術院会員、文化勲章など、一切の栄職、栄位を辞退する。 3月11日　「国史より観たる皇室」を起稿、同22日脱稿。 |
| 昭和22年  （1947年） | 85歳 | 3月2日　極東国際軍事裁判（東京裁判）法廷に、「宣誓供述書」を提出するも却下せらる。 9月9日　戦犯容疑、自宅拘禁を解かれ、21ヵ月ぶりに「晩晴草堂」の門を開く。 10月1日　「幽居の片影」を起稿し、同15日に脱稿する。 |
| 昭和26年  （1951年） | 89歳 | 正月7日　藤谷みさを女史を、史室秘書として招致する。 2月11日　『近世日本国民史』の執筆を再開する（昭和21年10月13日以来で、今回は口述）。 12月10日　ワシントン大学マリウス・ジャンセン教授（歴史学）の来訪を受く。 |
| 昭和27年  （1952年） | 90歳 | 4月18日　米軍より公職追放解除の報に接す。 4月21日　『近世日本国民史』第百巻の稿を畢わる。 5月　熊本・水俣に帰省する（戦後はじめての、そして最後の帰省）。 9月　『勝利者の悲哀』『読書九十年』を出版する。 11月　熊本県近代文化功労者として表彰される。 |
| 昭和28年  （1953年） | 91歳 | 2月、『国史より観たる皇室』を出版する。 6月5日、日比谷公会堂にて『近世日本国民史』完成記念大講演会に臨む。 11月　御殿場・青竜寺に墓碑を建てる。同月28日、同志社創立七十八周年記念式に出席。 12月　『源頼朝』上巻を出版する。 |
| 昭和30年  （1955年） | 93歳 | 正月25日　神社本庁の依嘱で紀元節に関する録音をとる。 11月6日　二宮の蘇峰堂にて、蘇峰を囲む会に臨み講演、緒方竹虎（自由党総裁）と歓談する。 11月21日　実業之日本社の依頼で、「三宅雪嶺を語る」を録音する。 11月28日　同志社大学にて「諸葛孔明について」と題し講演、翌日も「新島襄の教育」を語る。 |
| 昭和31年  （1956年） | 94歳 | 正月22日　緒方竹虎の来訪を受く。 2月25日　NHKの依頼で、「面影を偲ぶ－国木田独歩」の録音をとる。 3月25日　誕辰会。来賀する者200余名。 6月10日　健康勝れず「三代人物史伝」の筆を折る。この頃から発熱、病床を繰りかえす。 |
| 昭和32年  （1957年） | 95歳 | 4月1日　『西日本新聞』80周年祝刊の辞を起草する。 5月7日　正力松太郎を訪問し歓談する。 9月18日　NHKの依頼で蘆花の思い出を放送する。 10月22日　同志社に遺訓を書く。 11月2日　10月中旬の頃より膀胱炎を病み、尿毒症を併発し、長逝する。 |